

Bonjour

ボンジュール!!

2014年
6月12日号

Vol.164



日経に書かれていないホントのECB緩和

● ドラギ総裁、金融緩和へ

6月5日、欧州中央銀行(ECB)のドラギ総裁は追加の金融緩和策を決めました。

新聞では、「過去最低の0.15%」、「マイナス金利」の文字が飛び交い、6月11日付けの日経新聞でも『「マイナス金利」で時間稼ぎ』の記事が掲載されました。

しかし、本当のところはどうなのでしょう? 弊社運用部長から解説いたします!

● 「お金を世の中に出す」が重要

今回のECB決定のポイントは?

新聞で書かれている政策金利の引き下げやマイナス金利については市場では織り込み済みでした。

ポジティブ・サプライズだったのは「長期資金供給オペ(TLTRO)」と証券市場プログラムの非不胎化の決定です。

今までECBは金利を引き下げてきましたが、量的金融緩和には手をつけていませんでした。今回、最も重要なのは米国や日本のように「お金を世の中に出す」と決めたことです。

● 首を縦に振ったメルケル母さん

日米は既に量的金融緩和をしています
が、なぜ欧州は今なのでしょう?

振り返ると欧州にとって苦しかったのは、2010年のギリシャ・ショック、欧州債務危機の時でした。

なぜ、今量的金融緩和なのか?という各国の政治不安定化が背景にあります。

ドイツのメルケル首相は債務危機の最中であっても安易な量的金融緩和や公的資金による救済に反対してきました。

「どうせドイツが助けてくれる」と思われたら困るからです。

厳しいメルケル母さんのもとギリシャやスペインなどの債務国は財政再建に努め、インフレの抑制や経常赤字が劇的に改善しました。しかし、各国で何が起きたかという反EU、ユーロ離脱派の躍進です。厳しい宿題に国民が嫌気をさしてしまった…ということです。

メルケル母さん、一家(ユーロ)離散を食い止めるため、緊縮一辺倒から一步踏み出した、というのが今回の裏事情でしょう。

マーケットへの影響は?

為替の円・ユーロについては、量的緩和を実施すると通貨が安くなる可能性があります。欧州株式市場については、世界株式と連れ高しており、バリュエーションは高いとみています。しかし、今回の緩和で欧州は変わると見ており、強気で臨んでもいいかもしれません。